

芸術と教育

— 美術館の活用と鑑賞教育のすすめ —

筒井 通子

奈良文化女子短期大学

Art and Education

— Appreciation Education in Museum —

Michiko Tsutsui

Narabunka Women's College

人格形成の基礎となる美術教育に関心・意欲をもち、積極的にかかわろうとする子どもやその教育にかかわろうとする者を育成するための方策を考えるとともに、「美」を鑑賞する力を付け、それぞれの「生きる力」へとつなげる。

キーワード：芸術と教育、生きる力、表現力、人格形成、鑑賞教育

1. はじめに

平成20（2008）年、国際美術教育学会（InSEA 世界大会 in 大阪2008）で筆者は「小学校教育の中の美術教育の重要性」を述べている。学校経営、算数数学教育、放送視聴覚教育、図工、美術に関して幼児期、学童期、学生期の研究を続ける中で、学習指導要領で重要視されている「生きる力」について何が、根底にあるかをずっと探求してきた。

そのような中、新学習指導要領（小学校：平成23年4月～ 中学校：平成24年4月～ 高等学校：平成25年度入学生から《数学及び理科は平成24年度入学生から》幼稚園の新教育要領：平成21年度～ 特別支援学校の新学習指導要領等：幼稚園、小・中・高等学校に準じる。）では、学校、園、所での子どもたちの「生きる力」をより一層、はぐくむことが目指されているのである。

そして、教育の目標に新たに規定された内容に、「能力の伸長、創造性、職業との関連を重視」することや「伝統と文化の尊重、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、他国を尊重、国際社会の平和と発展に寄与」があり、学力の重要な3つの要素の育成に「知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力をはぐくむ」が明記されている。

また、「ゆとり」か「詰め込み」かではなく、基礎的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力

筒井 通子 〒631-8523 奈良市中登美ヶ丘3-15-1 奈良文化女子短期大学

の育成の両方の大切さが言われている。それらは、人格形成が根底に大きくかかわっている。

筆者は、人格形成の一翼を美術教育が担っていると考える。

また、「国際平和・交流」は、「芸術」の力を借りることによって必ずや前進するものとする。各教科領域、コミュニケーション能力の育成、造形表現の推進等で美術館を活用する（図1、図2：美術館入り口の展示）ことによって「芸術」と「教育」の推進を図ることの方策を提案する。また、その実践例をあげる。



図1 奈良市美術館の入り口

「人権教育のコーナー」（後述）で絵画として展示する「じろこ」「ぎん」（犬の名前）を新聞紙で実物大に制作し鑑賞への興味へつなぐ。



図2 「芸術と教育」

書道「タイトル」、文「各コーナー」、絵画「各シリーズ」、造形表現「新聞紙で制作した犬」と教育の目標を関連付ける。

2. 「芸術と教育」の意義

2.1 「今、なぜ美術教育なのか」

新学習指導要領では、学校で子どもたちの「生きる力」をより一層はぐくむことを目指している。目標の新たに規定された中には、「創造力」があり、学力の重要な3つの要素の中には「表現する

力」をはぐくむことが書かれている。また、2007（平成19）年度の4月に文部科学省における日本の全国学力・学習調査（国語・算数）が行われた。その中で文部科学省から出されている「平成20年度全国学力・学習状況調査解説資料」の中では、学習指導に当たって「様々な量の学習場面を通して豊かな感覚を育む指導を充実する」や奈良県教育委員会から出された「奈良県学校改善支援プラン」の結果から正答率が低い問題で、明らかになった課題の一つに「必要な情報を読み取ったり、活用したり、表現したりする問題の正答率が低い。」があげられている。

筆者は、算数数学教育を長年研究する中で、左脳は、言語と理論で思考し、計算したり、記憶したりする脳であり、疲れやすく持続力も少なくストレスもたまりやすい脳であることを学んでいる。それと比較して、右脳は、本能的な能力から発達した脳で、五感で瞬間的に情報を取り込んだり、瞬間的に記

憶したりでき、ひらめき、芸術性・創造性がある（図3）。

この左脳と右脳がバランスよく発達することが幼児期、学童期で非常に重要である。

右脳を活性化し、豊かな感性をはぐくみ、表現力をつけるために「芸術」と「教育」をおおいに関連させて人格形成を推進する。

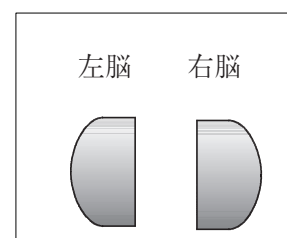


図3 脳

2.2 学校教育、生涯学習、美術教育との関連

筆者は、教職員生活の中で、家庭教育、生涯学習に関係する仕事をした。その中で、学校教育は、生涯学習の一つの過程であると考え。そして、美術はそれらの根底にあると考える。

- (1) 体験したことを表現することによって確かなものとなり、記憶されやすい。
- (2) 身近なものをよくみることによってものの形や、成り立ちに気付く。
- (3) 美しい景色や色、形を見て感動することができ、感動から表現が生まれる。表現は伝達の容易な一形式になる。

下記の全国公立小学校4・6年生と中学校2年生約1万4千人の調査結果を見てわかるように「太陽の昇るところや沈むところを見たことがほとんどない子ども」が3学年で2005（平成17）年で43%、「夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たことがほとんどない。」が35%に達している（図4・5）。経験のない子どもは1998（平成10）年より明らかに増加傾向にある。朝焼けや夕日、夜空の美しさを感じ、表現しように関心をもつことが今の日本の子どもたちには必要である。

太陽が昇るところや沈むところを見たこと

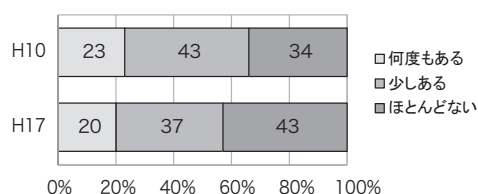


図4 太陽が昇る

夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと

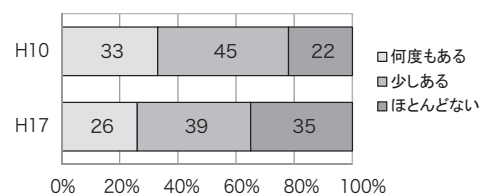


図5 夜空いっぱいの星

資料：『『青少年の自然体験活動等に関する実態調査』報告書 日本2005年度調査』から筆者作成

2.3 未来を担う子どもたちの育成

これからの国際社会に生きる子どもたちは、「日本の伝統や文化を基盤として国際社会を生きる」ことが求められている。また、2006（平成18）年度改正の教育基本法には、教育の目標の一つに「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」がある。これらの取組の一つとして芸術・美術による交流：文化交流があると考え。他国との交流の中で芸術・美術は、言語の違いを越えて心が通う。様々な国の多様な文化をもった人々との共通理解のできる機会となる。

以上のようなことから、芸術を通して人格形成につながる実践の一例を次項に示す。

3. 美術館の活用

3.1 美術館でのギャラリートーク

ギャラリートークは多様な方法で美術館を中心に組み込まれているが、学校教育ではより発展的な取組ができる（図6、図7）。

学校では、ギャラリーで学芸員と観賞プログラムを組んで、子どもたちの思考を刺激し、観察力を育て、自ら考えて言葉で語ることの推進ができる。また、作品について、制作された背景や歴史、作者の特徴などといった情報を聞いたり、質問したりその作品について、どんな印象を受けたかとか、参加者と美術作品を介してのコミュニケーションを楽しむこともできる。

そこで、美術館の機能（作品を調査、研究、収集、保存、展示、教育普及）を活用してそれらを活かした鑑賞教育を行う。参加者という形ではなく、鑑賞者が自分の意味付けをする。

作品は作者が制作して終わってしまうのではなく、その作品をだれかが見て感じて、何かが伝わることであれば作品の完成になる。

3.2 人格形成の目的をもったコーナーの設定

芸術を通して「豊かな人間性の育成」をする方策の一つとして美術館を活用し、視て読んで触って感性を豊かにするコーナーをつくる。イスも置いてみる（図8）。美術館の本来の機能を活かしながら作者の制作意図と併せたコーナーの設置をし、椅子、机を配置し、筆記用具やメモ用紙等を置いておく。

このことによって鑑賞者は聞くだけに留まらず自由にメモすることもできる。また、座りながら自分の意味付けができたり、自分の世界に入ったりすることもできる。

3.2.1 人権教育－豊かな人間性の育成を目指して

平成20（2008）年は、世界人権宣言の採択60周年



図6 ギャラリートーク

作者と話しながら何かを感じ、何かが伝わる、視るコーナーの設置。



図7 鑑賞者の中学生と作者のコミュニケーション



図8 鑑賞者が自由に視て自分の意味付けができるコーナーの設置

にあたった。世界人権宣言は、すべての人と国が守らなければならない国際的な基準としての人権を述べた宣言である。

「国際連合人権教育のための国連10年」に関する国連総会決議に「他者の尊厳の尊重、及びその尊重を保障するための手段と方法を学ぶための生涯を通じての総合的なプロセスを構成すべきである。」という（1994年12月）文があり、国内行動計画（1995～2004）では、人権教育は、国際社会が協力して進めるべき基本的課題である。あらゆる場を通じて人権教育を推進する必要がある。

しかし、現実には障害のある子どもにその子どもの心を傷つける言葉を言ってしまう子どもがいる。違いを認めそれぞれの多様性を大切にし、「豊かな人間性の育成」を一枚の絵を通して実践する。自他の生命と人権の尊重を中心にして、障害のある子どもの人権を尊重し、今日にいたるまでの真実を知り、違いを認め、それぞれの多様性を大切にするのである。

3.2.2 肉食アレルギーの犬『じろこ』の絵を通して

人権教育を推進する中で、障害に対してなかなか理解されない現実がある。幼児、学校教育でも人権教育の推進が重点目標となっている。どんな言語でどのように感情を込めてもなかなか共に感動し、共感することは容易ではない。

特別支援学級が新設されたとき、その教育目標の取組のために制作した実際にいたアレルギーの飼い犬「じろこ」の絵（図9）を展示し、その話をしながら、鑑賞者とコミュニケーションをする。ここに話そうとするものが心を込めて表現した絵には、人の心をゆるがす大きな力がある。



図9 「じろこ」の絵

「じろこ」の話（実話）

「『じろこ』に手をかまれた。腹が立ってしかろうと思って手を挙げ、ふと見た背中、血が流れ出ている。よくみると毛が食いちぎられ、引っ掻きまくった皮膚から血が流れ出ている。びっくりして病院へ行くと、生まれながらの肉食アレルギーがあったことがわかる。しかも、歯が反対性咬合だったのだ。何も理解していなかった飼い主…。

肉や硬い骨を与え続けていたのだ。与えられたものしか食べることができなくて、体は蝕まれ、イライラと痛さでさわろうとした飼い主の手にかみついたのだ。」この犬の絵を見せてそれを語り、相手の真実を



図10 「人権教育コーナー」

自らの「意味」を書く中学生。

知ってそして、共に理解し合って生きることの大切さ、知らずにしていることが相手を深く傷つけることがあり、相手の生命まで脅かすという話。

ギャラリーで作者の絵に込める心情を幅広い年齢層の人々が熱心に読んだり聞いたりした。そして、多くの感想が寄せられた（図10、図11）。

視覚を通しての文化力である。

幼児に対しては、造形を活かして新聞紙で作った「じろこ」、また、「夢と希望」の絵やエコフォームで

作った「じろこ」を使つての話など、視覚芸術で理解を促す（図12、図13）。

現在社会の子どもたちは、インターネット、ゲーム、テレビ、映画等、音声だけでなく五感を使う子どもが増えてきている。特に視覚を使う場面が多い。しかし、機会的な場面が多く、「意味」の学びがない場合が多いので「活用能力」に欠ける。美術・芸術のもつ意味を「絵」や「造形」を通して感じる体験の場の設定を試みた。



図11 「芸術」と「教育」

「作者、作品、鑑賞者」が互いにふれあう。絵の前にコーナーをつくり「じろこ」の話をする。
左：保護者と生徒



図12 新聞紙の「じろこ」

母親と幼児が鑑賞、母親は、コーナーで内容を読む。



図13 エコフォームの「じろこ」

保育園児が「じろこ」とふれあう。

3.3 絵にふれるコーナーの設定

芸術作品は、損壊や汚れてしまうこともあり、保存という面からも絵画や造形物に直接、触れることは少ない。しかし、作者の意図に触れて感じてほしいという思いがあれば、可能である。

根があり、幹が出て、枝から枝へとつながって宇宙までのびるような木「蒼（そう）」（図14）で鑑賞する。緑内障で視力を失った友、ふれることで感動する子ども（図15）、視力が弱くなってきた高齢者（図16）が、絵の具を盛り上げて形を描くことによって何かを感じることができる。



図14 「蒼 (そう)」
話を聞きながら実際に触ることができる。絵の具が盛り上がった絵。



図15 こうなってるのかあ
幹や枝を指でなぞって感じる子ども。



図16 孫を育てている祖母
「さわりたなりましたわ。上に向かっている感じがすなあ。」

3.4 JAXA宇宙航空研究開発機構と連携した「夢は宇宙まで」のコーナー

これからの子どもは、国際感覚や宇宙教育に関心をもつことが重要になってくる。しかし、個々に場の設定をすることは容易ではない。しかし、美術館の活用によって広い場所で企画できる。JAXA宇宙航空研究開発機構との巡り会いは、10年前から文部科学省とJAXAが開催した「宇宙シンポジウム」に筆者が参加してからのことだ。「宇宙の目を教育に活かす」方策に取り組んできた。それを絵画制作で実践した。「夢は宇宙まで」のコーナーを設定する(図17)。

JAXAの協力のもとに、宇宙に関する絵画制作をし、宇宙関係の本や宇宙食(図18)、パンフレット(図19)等展示した。

椅子にすわり、熱心に本を読む鑑賞者がいた(図20)。宇宙から帰ってきたアサガオの種を植え、開花を想像して描いた絵には鑑賞者どうしの会話が生まれていた。



図18 宇宙食



図17 「夢は宇宙まで」

JAXAのご協力で宇宙食や宇宙教育の本や現在の子どもたちの未来の(宇宙共生)。



図19 宇宙教育の資料

絵はがきは簡単に立体ロケットをつくることができる。



図20 「夢と希望」の絵と
宇宙教育のコーナー

宇宙から帰ってきたアサガオの観察記録や宇宙教育の本の展示を読む鑑賞者。

3.5 自然を感じるコーナー

筆者が水の流れに心を動かされて描いた絵のコーナー「水に魅せられて」(図21)と大和のよさを表現した「大和の風景」(図22)のコーナーを作った。そこで、鑑賞者が書いた感想を次にいくつかあげる。

○「水に魅せられて」

鑑賞者の感想

・爽快な水の流れを觀賞ニア時代の生きろに青春の如く心を鍛えてくれました。

水の絵の前でその「しぶき」を感じる者もいる。

作者は、水に自分の人生を現している。その何枚もの絵の中で自分の感性を通して作品を視ることによって自分の経験を通した見方が発生してくる。これが作品をより豊かにし、見る側の感性も豊かにするのである。



図21 「水に魅せられて」

○「大和の風景」

鑑賞者の感想

ふるさとを思い出、涙が出せりになりました。

作者は、「ふるさと」を愛している。その「ふるさと」は「心のふるさと」である。時で変化してしまうが、心にあるものは、消えることはない。生きる希望につながる。



図22 「大和の風景」

4 美術鑑賞教育のすすめ

4.1 鑑賞の仕方、機会の提供

筆者は、初の全国の教育関係者を対象とした「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」(主催独立行政法人国立美術館^{注1)})を受講し、鑑賞の仕方やワークショップなどを研究した。その結果、鑑賞する機会の提供が重要と考えた。指導できる者が美術館の機能を活かしながら教育と併せた鑑賞教育をすすめるのである。

「美術」と「教育」を併せ持つ「美術教育」は、作品の制作や研究をする美術そのものの教育、一方、美術・造形活動を媒介とした教育は、今新学習指導要領で言われている「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら(下線改訂)つくり出す喜びを味わうようにするとともに、造形活動の基礎的な能力を培い豊かな情操を養う。」を目標にした人間形成の一翼を担っている。美術館を活用した鑑賞教育が美術の見方を深め、様々な表現や思いを知ることができ、感性が豊かになることが分かる。しかし、なかなか企画から園、所、学校が行うのは容易でない。そこで、子どもや大人が自分の時間を利用して、自由に鑑賞できる場の設定を指導者がするのである。そこでは、自らの鑑賞に教育的意義をもたせるようにする。もちろん、メディア等を活用して「美術館へ行こう。」と呼びかけることも大切である。

また、教育機関では、アートカード^{注2)}で手軽に鑑賞学習として役立てるのもよい。

工夫された鑑賞活動を通じて「美」に興味をもち、表現することの楽しさや、創造力を豊かにし、創作する喜びを知って感性豊かな人格形成につながればと考える。

4.2 鑑賞者から作品制作へ

4.2.1 ふれあってつくる芸術作品

これからの国際社会に生きる子どもたちは、「日本の伝統や文化を基盤として国際社会を生きる。」ことが求められている。世界の人々と平和を愛し、共に相手を認め合いもっと身近に感じ、手を取り合って生きていくことが必要になってきている。

家庭、学校、地域、国を越えて、「鑑賞する」という受け身から、多くの人々と共に参加することによって作品が生まれる実例を紹介する。

実例1 参加型アート：子ども

参加者と作品ができ上がるまでのプロセス自体が作品となる。図23は「国際子どもふれあい芸術展」で日本、タイ、マレーシアの幼児、生徒と学生とアーティストが共に芸術・文化活動を通して相互理解をするために、お互いに自分の国を絵で紹介する共同制作風景である。できた作品は、鑑賞し合い、その後、話し合った。「友好」が絵で表現された(図24)。言葉は通じなくても一人



図23 日本、タイ、マレーシアの幼児とともに

一人が自分の感性を通して世界の「友好」を表現しているのである。この後、「友好」そのものになったことは言うまでもない(図25)。それらの場所は美術に関する場でなくてもよい。広場、許された街角、野原…、青空の下もよい(図26)。

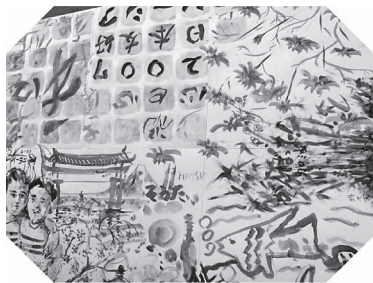


図24 アート作品



図25 作品を前に
コミュニケーション



図26 屋外でともに作品をつくる
児童、学生、筆者

参加のプロセス自体が作品となる。「一人一人の感性の表現」が「生きる力」の源になると考える。美術を通じて学んだことを話したり、学んだことを絵に表現したりして、子どもたちや学生に芸術を通じて平和を愛する人間に育ってほしい。体験や交流をして学んだことが「生きる力」へとつながる。

実例1 参加型アート：教員

これからの美術は、鑑賞するだけでなく、アーティストと共に作品制作に参加することで新たな創造意欲をもつことができる。ここに上げる実践例は、幼児教育の指導者が、前述の人権教育の話「じろこ」を聞きその後に絵画の共同制作をしたものである。実話を聞いた後の感動をもちながら技法を学び(図27)、それぞれのタッチで描いた作品である。制作後は、共に描いた作品という達成感、なかま意識の高揚にもつながった(図28)。協働を必要とする職場において共同したのである。また、描いたアート作品を印刷することにより、それぞれがその作品をもつことができ(図29)、その時の感動を温存することが可能になる。現にこの写真は、園の職員室に展示され毎日目に入ってくる環境にある。



図27 共同制作

「芸術と教育」では、自己の感性を豊かにするとともにより良い教育環境を整えること。そして表現する力、豊かな創造性を育むには指導者が力を付けることが重要である。

参加者からは、「自分の感性を磨くことが、子どもたちの感性を伸ばすことなのだと痛感した。」「幼児教育の重要性を再認識した。『生きる力』へつなげる実践を現場で生かしたいと思う。」という感想であった。



図28 共同作品の完成



図29 共同作品印刷

5. 課題と成果

近年、美術館を活用した鑑賞教育の充実及び学校と美術館の一層の連携が重要視されている。グループワークや鑑賞ツールを作成、言葉と身体を用いた鑑賞の方法を学ぶなど、多様なワークショップも行われてきている。しかし、多様な条件の中で美術館での鑑賞が決められた時間の中でできないことが多い。そこで、美術館の本来の役割を活用しながら自由に鑑賞できる場の設定を試みた。『生きる力』を「芸術」とともにはぐくむのである。

今の時代に必要な創意工夫・思考力・表現力を絵や造形物を鑑賞したり、時には制作したりする中で作者の気持ちに近付いたり、自分自身を表現できたりする。実物の造形物・絵・写真等を見ながらコミュニケーションをし、鑑賞能力を付け相手を理解したり、感性を豊かにするのである。

新学習指導要領とともに新しい鑑賞教育についての提案であった。400名以上の鑑賞後のアンケートを書いてもらえることができた。「なぜか、涙を出て止まらなかった。」という鑑賞者もあった。

展示された作品を鑑賞し、自分が気に入った絵を自分なりに読み解き、ふれあう人々の意見も聞きながら、作品について語る鑑賞者もいた。語り合うことで展示のテーマに気付いたり、新たな視点を持って作品を鑑賞することができた。アーティストが子どもたちと共に制作する過程では、作品を通じて作家と鑑賞者の多様なコミュニケーションの場を生み出した。この体験が日常に生かされ、生きる力へとつながっていく。

一人で視ることもある。いっしょに視ることもある。そのとき作品を一つの物語として鑑賞し、自分で創造性を豊かにしていくのである。

課題としては、美術館を活用するための経費が必要となってくる。そのため、定期的に活用しにくい。これに関しては、多種の機関との連携が必要になってくる。そして、「芸術と教育」に興味をもったものが集まり、組織として活動する必要性がある。

6. まとめ

芸術を通じて話をすることは、年齢の開きがあっても心を通わせることができる。芸術との出会いがあって感動が大きければ大きいほど変容がみられる。全教育の根底にある人権教育も視覚を通して話すことによってより大きく子どもの心を揺さぶる。鑑賞教育をすすめることによって、「子どもたちの今までのものを見る目が変わった。」と言う実践結果が出ている。また、「自分のプレゼンテーションの機会に絵を使うようになった。」「今まで何事にも無関心だった子どもが、鑑賞を積み重ねることによって、多岐にわたる教育分野ではやく要点がつかめるようになった。」「共同で制作活動を行うことによって協働意識が出てきた。」等の結果が出た。

芸術や文化は心を豊かにし、言葉の壁をこえて人々をつなぐ。文化力は大きい。「美」を感じ「美」を創造する人格は、「平和」を愛す。今言われている環境教育にもつながる。「美」を創造し、「美」を慈しむからだ。それらが「生きる力」につながるのである。

基礎学力と感性豊かな「生きる力」をもった子どもや教育者の育成は、共に重要であると考えます。

現代社会の中で悲しいことや苦しい時が多々ある。そのような時、強く生きる精神力、共に力を合わせることでできる人格、「夢や希望」を持続けること等が必要になってくる。課題もあるが芸術でその一翼を担いたい。芸術を通して他者とコミュニケーションをする。それはただ語り合ったというわけではない。実践した一つ一つの結果が自分自身をより豊かにするのである。

謝辞

「美術館の活用」に際し、奈良市美術館をはじめ、JAXA宇宙航空研究開発機構や多大なご協力をいただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 東京国立近代美術館を会場として、2006年（平成18年）8月7日（月）から8月9日（水）までの3日間の日程。
- 2) 独立行政法人国立美術館《東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館、国立新美術館》が製作している「国立美術館アートカード・セット」。「アートカード」は、遊びをとおして美術作品に親しみ、鑑賞学習を行うためのツールである。

参考文献

- 文部科学省（2008）中央教育審議会答申 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について．1-2．
- 奈良県教育委員会（2010）奈良県学校改善支援プラン．30pp.
- 青少年の自然体験活動等に関する実態調査報告書．日本2005年度調査．
- 筒井通子（2008）小学校教育の中での美術教育の重要性について．国際美術教育学会誌2008．7pp.